

第三百九十三回 青葉会

平成三十一年正月五日(土) 「吉例初芝居総見」 浅草公会堂の若手歌舞伎第一部
天牛さんら13名参加↓飯田屋(どぜう) ↓尾張屋(蕎麦屋)
市原夫妻ら7名参加
一月二十四日(木) 「初句会」 文京区民センター 午後一時半〜四時半

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 豊田ゆたか 中野一灯 山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 山崎亜也

山田けい子 渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章
福島正明 星田啓子 松崎浩(MH) 村田くに子 山本三恵

《互選句》

九点

動かざる浮子を見てをり懐手

孤舟 (猛・忠・彦・灯・正・啓・浩・
く・三)

六点

◎ ほかほかの人形焼買ふ初芝居
◎ 足踏みのミシンに小さき掛飾

ゆたか (紀・孤・千・敏・正・天)
一灯 (忠・孤・正・啓・浩・三)

五点

◎ 湯煙の寒灯一つ峡(かい)の底
◎ 囃されてピカソめきたる福笑

一灯 (孤・敏・ゆ・允・三)
昇 (眞・孤・彦・灯・啓)

四点

◎ あやふやな平和に生きて着ぶくれり
◎ 碁石打つ音のみ響く冬座敷

盛雄 (眞・紀・千・啓・天)
孤舟 (眞・灯・允・く)

◎ 小雪舞ふ積もれ積もれと都会の子
◎ 年ごとに乱るる文字や賀状書く

健介 (眞・孤・浩・天)
天牛 (ゆ・灯・啓・く)

◎ 大仏も目細めたる煤払
(◎:中七↓「目を細めたる」)

けい子 (紀・猛・忠・孤)

三点

◎ 処女句集選者も祝ふ寒造
◎ 春らしき芋掘踊り浅草歌舞伎

紀久男 (堅・孤・三)
忠彦 (紀・龍・敏)

(紀:下五が字余りなので↓「家の芸」又は「芸を継ぐ」)
熱気球春待つ風に上昇す
我が母校跡形もなく北風(きたおろ)す

孤舟 (彦・敏・灯)
健介 (龍・ゆ・灯)

◎ 口上も見得切る所作も初歌舞伎
◎ 故郷の味はひいたたく雑煮椀

ゆたか (忠・く・天)
全 (堅・猛・忠)

◎ 四股踏むや霜の花置く力石
◎ 片口で二合半(こなから) 酌むや槽(ぼた)の宿

一灯 (眞・紀・三)
全 (孤・龍・正)

二点

◎ 菰巻きて男(を) 松女(を) 松のほどよき間
◎ 朝刊を隔々読んで日向ぼこ

全 (眞・彦・三)
そらお (千・正)

◎ 冬の灯を路面に映し小雨降る
◎ 寒晴や上梓を祝ふ蔵句会

全 (孤・ゆ)
紀久男 (堅・灯)

(白雪の長寿蔵)
新春や海老蔵父子の舞ふ舞台

全 (忠・正)

◎ 厳寒が碧天高く深くせり

猛 (孤・龍)

一点

仁左衛門(にざゑもん)の技挑む松也の初歌舞伎
新年や昭和はさらに遠くなり
若手らに未来を見たり初歌舞伎
賀状来ぬ友に電話し安否問ふ
平成の最後の参賀淑気満つ
認知症の友にも賀状書きしかな
振舞はる年酒の名うれし帝(みかど)松
冬うらら浅草どぜう長い列

(◎…三段切れ。要推敲)

忠彦 (紀・允)
全 (紀・猛)
全 (紀・敏)
ゆたか (龍・浩)
昇 (允・く)
規雄 (猛・忠)
亜也 (堅・ゆ)
けい子 (紀・天)

こつこつと我が肌つつく浮かぶ柚子
稀勢の綱あまりに重し年流る
初芝居若手腕上げ頼もしく
初場所や若手めざまし突きと押し
大吟醸屠蘇散抜きで祝ひ膳
やはらかき冬の夕日をまどべにて

◎ 閑かなる産土神(うぶすながみ)へ初詣

天牛 (堅・浩)
盛雄 (千・允)
紀久男 (忠)
全 (天)
全 (堅)
全 (浩)
全 (孤)

猫八で聞く鶯の初音かな

(◎…物まねでは季語にならないのでは。「鶯の」は不要と思う)

民主教育(あかぎれ) 凍垂れにて受けし

全 (紀)

(紀…同世代でよく分かります)

星三つ生まれし西空除夜の鐘
鴉一羽ねぐらへ急ぐ冬夕焼
拝領盃(はい)いはれ語りて屠蘇祝
独り聞く平成最後の除夜の鐘
買初は龍角散ののどの飴
◎ 年玉の大きなギターに孫びつくり
浅草は若手役者の初歌舞伎

ゆたか (龍)
規雄 (猛)
亜也 (紀)
けい子 (灯)
天牛 (彦)
全 (孤)
全 (紀)

●次回青葉会

* * * * *

二月二十八日(木) 午後一時半〜四時半 文京区民センター

当季雑詠五句 投句二句

以上文責 紀久男